
花の微笑と美少年

上原夏野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花の微笑と美少年

【Nコード】

N5023B

【作者名】

上原夏野

【あらすじ】

「わたし、美少年が好きなの。」だからごめんなさい。と今日も彼女は美少年でない男に言うのだ。

「でもわたし、美少年が好きなの。」
だからごめんなさい。と彼女は言った。しかし、彼女の言葉を聞くまでもなく、僕は彼女がそう言うことなんて百も承知だった。

オレンジが入った明るい茶色の髪の毛を、くるくると内側に緩く巻くのが彼女の中で最近流行っているらしい。まるで西洋人形だ。透けるように真っ白な肌。小さくも大きすぎもしない形の良いくつきり二重の目は、自然にカールした長い睫毛に縁取られている。それほど高くはないが、形の良い鼻と、小さく愛らしい口。

彼女は美少女なのだ。そして本人もそれを十二分に認識している。
「十七年間言われ続けてきたら、そう思うしかないじゃない。そう思わない？」

それはそれは可愛い微笑みでそう言っていたのは、つい先日のことだ。

寝る準備ができたなら、彼女の部屋に行くのが僕の日課だ。

「もう少しましな断り方してやればいいのに。」

部屋に入るなりそう言う僕に、だって一番わかりやすいじゃない。と彼女は言う。毎回お約束のやり取りだ。

「それに、美少年が好きなのは本当だもん。」

僕は少し驚く。彼女はいつもなら、この話を続けようとはしない。無意識なのだろうけれど、無理矢理違う話を持っていくのだ。

「…へえ。本心だったんだ。てっきり告白を断るための口実だと思ってた。」

僕はベッドに座っている彼女の隣に同じように座る。彼女から僕と同じシャンプーの匂いがする。

「うん、本当。」

「……へえ。」
真剣な瞳で僕を見つめてくる。いつもなら彼女が考えていることなんて、手に取るようにわかるはずなのに、今は何がなんだかさっぱりなのだ。

「…里緒？」

「うん。わたし、美少年が好きなのだ。」

「…へえ。……だから？」
彼女が何を言わんとしているのかを、まったく理解できなくて困ってしまう。

そんな僕を見て、彼女はくすくすと笑いだした。なんでもない。と言って笑う彼女の瞳には、もう真剣な色はなかった。僕は何故か少し安心した。

「亮はさ、美少年だよね。」

笑いながらそんなことを言う。

「それは、自分が美少女だって言いたいのか？ほとんど同じような顔じゃなか。」

「違うよ。わたしと亮は、同じ顔なんかじゃない。」

わたしの方が、全然可愛い。と言って、また楽しみに笑う。

「ほら、もう寝るよ。」

僕の言葉に一瞬口を尖らせながらも、すぐに笑顔になってベッドに入る。

「里緒。」

「なあに？」

「……………明日は髪、どうしたい？」

「ん〜亮にお任せ。でも、今日みたいに巻いてほしいな。」

と笑顔で言う。僕は、めんどくさいな。と苦笑する。

明日もまた二人で仲良く学校に行き、そしてきつと彼女は、いつものように例の台詞で美少年でない男を振るのだろう。

そんな明日のために、僕達は今日も手を繋いで眠るのだ。

(後書き)

はじめまして。上原夏野です。未熟者で、まったく小説とは言えませんが、これからよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5023b/>

花の微笑と美少年

2011年1月27日03時23分発行